

QCサークル誌を活用し、QCサークル活動(小集団改善活動)のレベルを上げよう

QC みんなと改善 サークル 5

2020 MAY No.706

特集

QCサークル活動の 活性化の工夫あれこれ

体験事例

ユニット内水入り確認の根絶 ～自考力を養った若手奮闘記～
ダイハツ工業㈱「プロジェクトスーパーXサークル」

ワンポイント事例

事例1 ダイス交換時のやり直し作業ZD活動
㈱ブリヂストン「Evolutionサークル」

事例2 小児の点滴をスムーズに施行できた率の向上
社会医療法人 水和我 水島中央病院「ポットサークル」

株式会社岩手村田製作所

取締役工場長

島田 正彦 さん

“維持力”をしっかり根づかせながら
様々な改善に取り組んでほしい

Top トップからの
メッセージ
Message



ザ・シヨット
— 写真で綴るQCサークル紀行 —

増幸産業株式会社

スーパー 6S 活動と PT 活動を両輪に
業務の質向上と人材育成を追求



注目した「DDTサークル」の3人。手にしているのは、テーマとして扱った摩砕用の特殊砥石



本社を訪ねると、95周年記念で制作したマスコット“MIRAIちゃん”（写真）と90周年で制作した男子の“MAXくん”が歓迎してくれた

増幸産業(株)

スーパー 6S 活動と PT 活動を両輪に 業務の質向上と人財育成を追求

かつて「鑄物の街」として全国的に知られた埼玉県南部の川口市。市の中心部に超微粒粉碎機メーカーの増幸産業^{ますこう}はある。従業員数 29 名の中小企業ではあるが、経営トップは「小さな大企業になる」と社内外に向けてアピールし、創業 100 周年を迎える 2022 年に向けてさらに意欲的な挑戦を重ねている。とにかく個性的でユニークな会社であるのは、間違いない。

社内で繰り広げてきた改善にかかわる取組みについて聞くと、相当な本気度と粘り強さが伝わってきた。活動ぶりはとても大変そうに見えながら、それでも従業員たちの気持ちが楽しそうに活気づいている様子も同時にわかり、じつに興味深かった。

私たちの“プチ自慢”

社はなんと、「おもしろ可笑しく一所懸命」。それを文字どおり有言実行している社長の増田幸也さんは多彩な趣味人で、また大の音楽好き。自作曲を収録した CD をこれまで 5 枚自主製作している。そして社内には社長と同じく楽器演奏を楽しむ人が多かったこともあり、近年は毎年 12 月、JR 川口駅前のライブハウスを借り切り、Masuko ミュージックフェスティバルも開催。従業員や家族、協力会社、知り合いなどが集まり、毎回大変な盛り上がりを見せている。



昨年12月の“Masukoミュージック・フェス”

仕事を通じて仲間と幸せも追求する「スーパー 6S 活動」を全社展開

◆ トップダウン方式で改善活動のテーマと編成を毎回決定

増幸産業の謳い文句は、「ダイヤモンド以外のあらゆる物質を超微粒化します」だ。看板製品は石臼式超微粒粉碎機「スーパーマスコロイダー」。2枚の砥石を使って多彩な材料を、ナノレベルの粉末、ペースト、乳化などの仕様に仕上げられる。食品、医薬品、ケミカル、電池材料など幅広い分野で活用され、海外の約60カ国にも輸出されている。

このような強みを持つ増幸産業のDNAには、“変化”の2文字が刻まれているのではないか——。そう思わせる足跡がいくつもあった。最たるものが、整理、整頓といったいわゆる5Sにかかわる取組みだ。1994年12月に導入したこの基本的な改善活動はその後、新5S、新6Sと発展。2013年7月からは創造、進化、成功、成長、深奏、幸福というキーワードをベースにしたスーパー6S活動へとバージョンアップし、今に至っている。従業員に飽きさせないための工夫という側面はあるにしても、この活動をいかに重視しているかという企業姿勢の表れといえるだろう。

この5Sからスーパー6S活動へと進展していく流れと足並みをそろえるように展開してきたのが、QCサークル活動だ。20年ほど

前からはプロジェクトチームを略したPT活動と名を改め、目標必達を重視した取組みになっている。取締



石臼式超微粒粉碎機「スーパーマスコロイダー」

役の増田さんが、活動の進め方の特徴を教えてくれた。



取締役の増田真也さん

「10年ほど前からテーマ選定を、トップダウンスタイルに改めました。部長たちが集まり、社長の考えや部門方針を軸にしながら各職場からの意見も重ね合わせていく。優先順位の重みづけをして、課題とするテーマを半期ごとに決定します。次にそのテーマを取り組むのにふさわしいチームに全従業員を振り分けます。だからPT活動の多くは部門横断の形が基本だといえます」

チーム活動の起点は、会社の年度初めとなる7月と半年後の1月。社内発表会も年に2回あり、それぞれ2ヵ月前には中間発表会の場も設けている。全社での活動なので、そこで発表するテーマは多岐にわたるといえる。製造工程の課題解決はもちろん、製品輸出のための公的認証取得や教育&評価システム構築、あるいは情報セキュリティの導入など、会社の将来を見据えて必要と考えられる難易度の高いテーマが少なくないようだ。

◆ QCサークル指導士を育てPT活動のレベルアップをはかる

増幸産業でPT活動を実践しているのは、通常は7~8チームほど。特に推進事務局といった組織は設けていないものの、活動を盛



特許を持つ摩砕用特殊砥石。多彩な種類がある

り上げる力の入れ方には感心させられた。

たとえば、QC 面談。これは毎月1回開くもので、面談者は社長と会社 OB である顧問の2人。各チームは面談日の1週間前までに活動状況や問題点、相談したい事柄などを前もってメール送付するのが決まり。それをもとに、社長と顧問が確認やアドバイスをしている。

増田さんによると、近年はQCサークル指導士の育成にも力を注いでいるという。増田さん自身も有資格者で、日科技連のASEAN訪問・洋上大学、あるいは資格認定コースの研修、試験を通して、少しずつ増やしていく方針だという。現在は4人の有資格者がいて、各チームを実践的にサポート。「この2、3年でPT活動全体のレベルが着実に上がり、チーム間のばらつきはなくなってきました」と増田さんは喜ぶ。

また、毎月の第1土曜日に開催している、丸一日の「勉強会」と名づけた場もある。通常業務から離れて全員が集まる会で、社長による会社の方針や現状、課題などに関する話のほか、全員が一人ずつ公私両面でのいろいろなことをスピーチ。毎月、多様な学びのプログラムを計画し、QC関連知識の研修も従業員が講師役となってやっているという。

このような環境下において繰り広げられるPT活動の中で、未知の領域への挑戦ともいえるような事例があると知ったので、メンバーたちに話を聞いてみた。チーム名はDramatic Ditch Teamの頭文字で「DDT」。Ditchは溝を意味し、



社内で誰もが目にする大きな掲示物。「活動宣言」では社長も含め全員が、個人目標、取り組むPT活動のテーマ、個人的な健康目標を見える化



毎月1回のQC面談。右側の人が顧問

製造部の砥石グループと技術グループの3人から成るチームだ。

テーマは社長方針を元にした「砥石目切り加工の機械化」。砥石に多様な溝を刻む手作業の目切り加工を、マシニングセンターという数値制御の

自動工作機械による加工に切り替えるという課題達成型QCストーリーを使った取組みである。が、チームリーダーを務めた近藤さんによると、最初はかなり戸惑ったらしい。

「砥石加工を機械化できたら、自分たちは随分楽になります。でも肝心の機械のことをわかる人間が社内に一人もいなかったので、まったくゼロからのスタートでした」

◆ マシニングセンターの導入で 砥石の目切り加工時間を大幅短縮

増幸産業が取り扱う砥石の生産量は、これまで年々拡大の一途をたどってきた。目切り作業の機械化を探究した最大の理由は、それだ。加えて目切り作業には熟練の技術が必要であるとともに、手作業であるため品質の安定性の難しさもある。目切りの業務を主に受け持つ宇田川さんは、機械化を検討した際に感じた困難さをこう話す。

「自社製の砥石は特殊で、細菌による汚染



製造部砥石グループ・主任の近藤計夫さん

「データを採り、分析する重要性を改めて実感しました」



手作業での砥石目切り作業



マシニングセンターの前で議論する3人



砥石グループ・係長の宇田川祐善さん

防止などができる無気孔タイプ。非常に堅く、機械に取りつける切削刃物をどうするかなど、いくつもの難題が浮かび上がりました」

一口に砥石といっても顧客の業種や求める仕様に応じて材質や溝の形状などが異なり、種類は多種多様。その中から機械化導入の利点が特に大きいタイプを絞り込み、PT活動を進めていったという。

マシニングセンターに関する知識、経験をメンバーは誰も持たないから、まずはメーカーを訪ね、相談。いろいろ教えてもらいながら活動の道筋を探っていったが、当然のように多くの試行錯誤と失敗の連続。そのあたりの説明は残念ながら省略するが、難題の一つと向き合った櫻井さんは、こんな話をしていた。



社内に設置し、本格稼働するようになったマシニングセンター

「自動機械に組み込むプログラムづくりを基礎から勉強。さらに刃物の軌道、回転数、送り速度、切込みの深さなどでも、何度もやり直ししながらの模索が続きました」



技術グループ・課長の櫻井智崇さん

結論からいえば、当初設定した年間作業時間 25%削減の目標を大幅に超え、47%削減を達成。そこに至る過程では、毎月1回のQC面談における顧問の熱のこもったアドバイスが大いに背中を押してくれたようだ。そして近藤さんと宇田川さんは、この活動を通じて「データを採り、分析する重要性を改めて実感しました」と口をそろえた。

「DDTチーム」は昨年7月、この改善事例をQCサークル関東支部埼玉地区主催の「小集団改善活動発表大会」でプレゼンし、金賞を獲得。同時に埼玉県経営者協会会長賞に輝くという栄誉も手にした。

ちなみに増幸産業はこれまで同地区の大会に参加してきたが、増田さんによれば更なる見聞の拡大とレベルアップを求め、国内各地の社外大会にも積極的に社内チームを派遣していく方針で計画を進めているそうだ。

(取材・文 井上邦彦)